

人格分野の発表（口頭・論文）の回顧と要望

高橋 茂雄

（香川医科大学）

はじめに

日本教育心理学会総会において、人格分野に所属する研究がどういう内容であるべきかの規準について検討したことを聞かない。しかし暗黙のうちに総会発表論文集の中の人格分野に掲載されたものを人格研究と認めてきた。果たしてそれでよいのだろうか。第27回総会発表論文集のなかの人格401から人格454までの54の発表内容を読むうちに、人格分野に編入されるべき研究発表の規準は果たして何かを考え、検討する必要があることを感じた。

筆者も8年前に、総会を引き受けた経験があり、その時にそれをどう検討し処理したかについて記憶がない。おそらく、慣習的に処理したのであろう。

このことは総会発表ばかりでなく、'84年7月から'85年6月までの1年間に教育心理学研究に発表された論文については、総会論文集を規準として、筆者が20の論文を選んで人格分野所属の発表とした。そこで今回はこのことについて、これ以上詮索しないこととした。とも角総会発表論文集54と教育心理学研究に載った20の論文、合計74の研究発表を一通り読んで、まとめようと決心した。

なお、同期間中に発表された日本心理学会第49回大会発表論文集から71、同期間に心研に発表された論文15、合計86の研究発表についても、比較のために読んでみた。

筆者はかつて心研の臨床分野に論文を幾つか発表した経験から、自然に心が向いた。なお現在奉職している大学の関係から、日本心身医学会、日本医学教育学会にも入会している。これらの機関誌の内容も参考のため読み返してみた。

こうして資料を整え、一通り読んで、さてこれをどうまとめようかということになり又迷いが生じた。先ず日本教育心理学会発表の74の論文・口頭発表について分類を色々やっていたが、結局、1)適応・指導、2)発達、3)人格（狭義）、4)社会、5)教授・学習、6)測定・評価という6領域とすることに決した。そこで74の発表（口頭・論文）の1つ1つを内容からみて、それをどれかに所属させる作業をやった。次に順序不同の発表を、夫々どう表示するかについて考え次のようにした。例えば研

究発表の場合ならば402（小泉ほか）というふうに、論文の場合ならば、32：3（淵上）というふうに表示した。402とは研究発表論文集の番号であり、32：3というのは教育心理研究第32巻第3号ということである。

1)適応指導

401（清）は、適応・非適応及び規範意識と学校生活の諸領域との関連性をさぐり、ひいては学校生活にかかわる諸要因が適応・非適応ならびに規範意識に及ぼす影響をとらえることを目的とした研究であった。

小学5年生を対象とした調査の結果は、想定した全ての学校生活の領域と適応感の間に予想された正の相関がみられた。男女全体についてみると、学校・学校生活全体と友人関係が最も比重が大きく、ついで、勉強・進学とつづく。友人関係をのぞく部活動がこれに続き、先生との関係はそれよりもやや比重が小さい。男女を比べると、女子は男子に比べると、学校生活と適応感との関連性は弱い。そして、家庭満足感と適応との関連性の強さに匹敵する。この研究は地道な研究を更につみ重ねて、今後学校、家庭をふくめた前思春期ごろの適応指導の実践に役立つ実り豊かな成果を期待したい。

402（小泉ら）の発表は「転校生の新教育環境への適応に関する研究」で、内容から誰でも読んでみたいテーマであるし、しかも従来のソシオグラムにかわり、PDMからの分析方法を用いた。現代は転勤族が多く、とくに海外からの帰国子女の日本の学校生活への適応が注目されている時にふさわしい研究といえよう。そしてPDMは児童の対人環境測定においても有効であった。結果は、転校後1年で転校による友人選択率は、それ以前から在籍していた者と比べて差がなかった。ただクラス替えがあった場合は、転校生も在来生もともに友人選択の変動率も高くなる。クラス替えのない場合、転校生はクラス成員の社会的地位の認知が容易であると考えられ、そのために、対人関係網構築の際に重要な役割を果たす anchor person が獲得されやすくなり、延いては比較的早期から友人関係を発達させることが可能となるのではないかという。412（久世ほか）の「中学生・高校生の学校生活への適応に関する一研究」がある。ここでは清水ほか（1977）の研究を引用し、学校適応と仲間

志向の2本の軸によって、生徒を4つの類型に分け、類型別に学校生活に関する5つの質問項目群との関連を述べている。その結果、学校生活に適應している者ほど、ここで取り上げた心理学的変数のほとんどで得点が高いということである。一方仲間志向という点からみると、仲間志向の高い者ほど信頼感が高いという。

適應問題は現代小・中・高校教育の如き義務教育・中等教育段階においては特に重要問題であり、教育心理学が実践の現場と深いつながりをもつ以上、さらにこれらの研究が広く且つ深くなることを期待したい。以上のほかに、適應指導の問題として大切なのは進路指導である。

先ず32:3(淵上)の「大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的影響源に関する研究」をみてみよう。本研究は高校生が大学進学を決定し、それに基づき特定の大学を選択するに至る動機について検討し、それらの動機がどのような人々からの影響をうけることによって決定されるかを明らかにしようとした。その結果として、大学を選択する際に生徒が適性が将来のことを考える上で、教師の影響力が大である。生徒が志望大学の経済的、地理的要因のことを考える上で母親の影響力が大である。また特定大学選択動機のちがいによって志望大学のイメージにちがいがみられる。すなわち、特定大学選択動機として自己実現への適合をも生徒は、他の動機をもつ生徒に比べて、自分の志望大学を勤勉であると捉え、まじめであると捉える傾向がある。何と云っても高校生にとって教師の影響は重大で自分の一生を左右しかねない。教師から影響を受けたと認知している生徒は大学進学志望動機として大学の本来的機能をもつ生徒が多く、さらに彼らが大学を選択する段階になると自分の適性が将来の職業について考慮する生徒が多い。

33:2(田中ら)の論文は「職業選択に及ぼす親の職業的影響——小・中学校教師・大学教師・建築設計士について——」である。本研究は、小・中学校教師、大学教師及び建築設計士の職業に長年就いてきた父親を対象として、親の職業が子供の職業選択にどのような影響を及ぼすかの問題を、子弟が親と同じ職に就く、いわゆる職業継承性の観点から究明したものである。その結果、父親と同じ職業を子弟が選択する割合は、小・中学校教師、大学教師及び建築士においてかなり高いこと、父親と子の職業環境に有意な関連が認められ、職業継承性の規定因として、親の職業的態度、子弟の年齢及び学歴が重要である。これらの結果は親と子の環境型の類似性を示唆した Holland 仮説を支持する。

こういう点からみると、進路指導においては教師の指導も重要であるが、親子関係も微妙な影響を与えといえる。この2つの情報や指導をいかに生徒が受け入れ

て、主体的に統一し決定し実行するかについての詳細な研究が今後も必要であろう。

なお進路に関しては32:3(下山)の「ある高校の進路決定過程の継断的研究」があり、その中で下山は最近大学生の不適応現象(留年、アパシー、モラトリアム等)が注目され、その原因として大学入学以前の未熟な進路決定がなされている(岨中1981)。このことは現在大学の教育に職を奉じている者として、心のいたむ問題であり、受験産業に支配され易い現在、受験指導に大きな警告となる。

指導の問題は高校では生徒指導といい、大学では補導というが、両者ともいわゆるガイダンスの問題である。この面の研究として更に次の2つの発表が注目される。

419(松原)「大学生の留年に関する研究」と440(八島ほか)「児童の Locus of Control に関する研究——宿泊教室の効果」がある。松原によれば、大学生の留年には、不本意による留年、受験のための意図的留年、病気による留年等がある。そして留年数は全国的にみて20—25%で、これらの留年生のなかで、不本意留年生は、休学や退学をし、なかには自殺するものもいる。そこで留年生の心理的諸問題について調査研究し、今後の教育に役立てることを目的としたこの研究は大学に奉職している者として、特に補導を考えている指導者には有益な研究である。そこからカウンセリング活動がはじめられる。就中不本意留年を防ぐために今後どうしたらよいかについて、きめ細かな研究と実践が期待される。

440(八島ら)の研究は興味ある課題である。国立大学では文部省からの予算をもらい、大学入学後、学生の宿泊訓練を実施しているが、その成果がどうであったかという調査研究報告が乏しい。ただ参加すれば学生指導に役立つのであろうという安易な見透しが一般的であるように思う。本研究では中学校2年生298名に対し、3日間の宿泊訓練をした前日と直後と2か月後に、Pre 調査、Follow-up 調査を実施し、かねて「宿泊教室における自己反省質問紙」も実施した。

宿泊教室は生徒の Locus of Control の変容として、その効果をとらえることができるかどうか、つまり期待される内的統制型への移行が見られるかどうかを明らかにする必要がある。この結果として第1に生徒一人一人について内的化を調べるために、内的統制点を求めて検討したところ男女とも有意に内的化している。次に宿泊教室を体験した後に急激に内的化したのが、2か月後には再び元の3か月前の状態に近づいていた。すなわち宿泊教室が内的化への敢行の機会として設けられたという点で注目に値する。更に付言すれば、このような機会が学校生活の中で適切に設けられたならば、宿泊教室の効果

が維持されるし、場合によっては、より内的化への敢行が期待できるものと思われる。その効果がもとのもくあみになるのは、この2か月後に与えられた強化の内容が不明であり、何が消去に寄与したかが明らかでない以上、説明することができない。

指導の要点はセルフ・コントロールを獲得させることにある。ところが自己反省質問紙とNs (33) Scale 得点との相関から、「自分がより活かされていると感じる、学校生活において満足できるということが、自己を内的統制型として捉える上で重要な指標であるように思われる」と報告していることは興味がある。以上の適応指導においては児童・生徒・学生が学校において満足的な生活をしていることが重要なきめ手であり、またそのことは家庭における満足・快適な暮らしと深い関連があろうと思われる。

2) 発 達

青年期を発達の観点から把えた研究がかなりあった。研究発表で7つ、論文4つ、合計11であった。

口頭発表では414(山田)が「青年期の自己概念」で発達をとりあげている。大学生100名を対象とし、20答法における記述を分類するため、自己のあり方についての諸概念を分類するため3項目20種類の内容カテゴリーと、自己が意識される際の意識現象における全体的事態を分類するための3項目27種類の構造分析カテゴリーを用いた。

データの処理方法はMPIのN尺度の結果をもとにして、神経症的傾向が低い群(L群)、神経症的傾向が普通のものの群(M群)、神経症的傾向が高い群(H群)に分け、3群間で各分析カテゴリーの出現率について比較検討した。

その結果、L群とH群間の差異は、明らかに自己概念の成立過程についての両群間での差異に対応するものであり、現実の自己の記述についての両群間での差異を手がかりとしていただけでは知り得なかった情報といっよい。

次に415(佐藤ら)「大学生の自己受容に関する研究(1)」がある。あるがままに自己を受け入れることは、真の自己確立にとって真に重要な概念である。佐藤らは従来の実証的研究は妥当性に問題がありとし、より本来的な自己受容に出来る限り接近し、かつ実証的に操作が可能な形で検討できる新しい自己受容測定尺度の作製を試みた(1984)。

本研究はこの測定尺度(26項目)を青年期特に大学生に焦点をあて、大学生の自己受容の様相を性差及び発達差の側面から調査検討することを目的とした。

その結果、大学生においては男子の方がより自己受容的で、自己に対し寛大でゆとりある姿が見受けられた反

面女子が全ての面において自己に対し否定的であり、特に対他者関係において気になるという“こだわりの多さ”や“ゆとりのなさ”が明らかだった。

また大学時代の前半から後半にかけての自己受容の程度に明確な推移は見られなかったものの、年齢を重ね成人に近づくにつれ自己をより受け入れやすくなる傾向がみられた。

青年期の問題をとらえるためには、何といたってもIdentity 概念を鍵として、発達のとらえる必要がある。ここでは2つの論文がある。

先ず32:2(大野)「現代青年の充実感に関する研究——現代日本青年の心情モデルについての検討」がある。

Erikson (1959) の自己同一性という概念が青年の心理を鍵概念として扱われるようになって久しいのに、これを更に発展させ、個々の青年の自我同一性の様相が青年の生活気分までに影響を及ぼしているという研究を聞かないことから本研究を企図したという。

本研究では、「青年が健康な自我同一性を統合してゆく過程で感じられる自己肯定的な感情を充実感とよぶ」としている。

西平(1979)の「充実感とその青年の健康な自我同一性の実感である」という考え方を発展させ、充実感・生きがい感は、その青年の信頼、自立、連帯によって説明され、しらせ気分は、不信、甘え、孤立によって説明されるという現代日本青年の心情モデルを提出した。このモデルでは充実感、生きがい感が自我同一性統合の方向と対応し、しらせ気分が自我同一性拡散の方向と対応している。

本研究では、この西平の心情モデルには含まれているが、大野が試みた現代青年の充実感を測定する尺度(1980)の調査項目に含まれていない“自立—甘え”の次元を測定する項目群を新たに作製し、これを追加し、調査実施した。本研究は研究Ⅰと研究Ⅱから成り立つ。

その結果として第1に充実感—退屈・空虚感の次元と自立—甘えの次元の間には、相互にかなり高い相関がある。第2に現代青年の充実感、充実感尺度の因子分析によって、西平の心情モデルに示された構造をもつことが支持された。第3に充実感気分—退屈・空虚感、時系列に実施した場合、他の因子と比較して得点が不安定であり、自立・自信—甘え・自信のなさ、連帯—孤立、信頼・時間的展望—不信・時間的展望の拡散は、充実感気分—退屈・空虚感に比較して安定しているという。

もう1つは、32:4(高橋)の展望にのせた「自我同一性と Marcia 同一性地位面接：批評的展望」である。

Erikson による自我同一性の論及以来、この概念が青

年心理学はじめ社会科学にも広汎な影響を及ぼしているとして、過去20年間、多くの方法で同一性の操作的定義を試み、これとパーソナリティの発達、対人関係、性差などとの関連を検討している。一般に3つの研究方法—Q分類、質問紙法、半構造化された面接 (Marcia, 1966) 等がある。本研究の目的は同一性地位面接の理論的基礎を考察するとともに、面接手続の信頼性妥当性を論評し、さらに今後必要と考えられる研究方法をいくつか提起することにある。

以上紹介した外に人格を発達の観点から考察した研究や論文は多い。413 (今林)「青年期の位置づけに関する研究」、411 (高橋)「高校生における心理社会的成熟の現象学的研究」、442 (鎌田)「内的—外的 Locus of Control の年齢的变化」等も、一読に値する。なお原田が発表と論文において青年期の政治的態度を取り上げているのも、適切な研究と考える。

3) 人格 (狭義)

この分野では所謂性格というものについての研究は発表で5つ、知能を扱った発表が3つ合計8つであった。

先ず426 (若林)「パーソナリティ類型論の理論的検討 (II)—3気質類型・複合構造モデルとパーソナリティのフラクタル性について—」について述べる。パーソナリティを把握する上で適用される「類型」は、因子分析やテストなどによって確認されるとともに、実際の個々の人間の行動を反映するものでなければならない。最近では因子論的妥当性が重視される傾向が強くなり、ために類型論本来の特徴であった人間を直観的・全体的に把握する視点が忘れられていた。若林は数年来の類型論についての研究のなかの1つとして、類型論と特性論との統合を試み、類型を特性の上位概念であるとともに、特性を超えた存在として考え、そのモデルを「3気質類型・二重構造モデル」とした (1984)。

本研究では、その後のデータ集積の結果を加味し、より妥当性を高めるために修正した新しい類型モデルを報告するとともに、この類型モデルが特性論とどのような関係をもっているのかについて検討していく。

パーソナリティにおいて類型論と特性論との関係を論じ、個人のもつ特性傾向は、その個人の気質類型を反映しているという fractal 性をもつと考える。fractal 性の概念を導入することによって、類型論と特性論との真の意味で統合が可能になったといえるのではないだろうか。

fractal 性は Mandelbrot, B. B. (1977) によって数学的に類型化されているが、パーソナリティもこのような性質をもっていると考えられる。彼の fractal 性とは、いわゆる自己相似的入れ子構造という性質であり、どのような微小部分をとっても全体の構造がその中に縮

少されて含まれるという、数学的にはカントール集合と呼ばれるようなモデルである。従って、パーソナリティにおいても、個人のもつ特性傾向は、その個人の気質類型を反映しているという fractal 性をもつと考えるのである。

次に427 (桑原)「人格の二面性について—新スコアによる検討」がある。

人格の二面性について、これまで TSPS を用いて研究してきた。森 (1983, 心研54, No. 3) によって二面性を研究するスコアとして S- をとってきた。森は新しいスコアを考察した (1984)。これは各評定値の和 (S+) と (S-) そしてさらに、対語のもつ対立度を考慮した S- の3つを統合したものである。

この新スコアも旧スコアも P, N の双方について独自に計算され、それぞれ SP, SN と名づけられた。すなわち項目は望ましい意味をもつ語 “P” と望ましくない意味をもつ語 “N” からなっている。

本研究は新スコアによって、二面性の人が、どういった性格特徴をもつかという点について検討しようとする。その手がかりとして今回は TSPS と他の質問紙との比較を用いた結果を発表した。Ss はすべて大学生であった。

SP, SN の二面性群について、おぼろげな像はうかぶものの、まだ、はっきりとした像は結べていない。今後は異なった Ss を対象として TSPS を実施し、さらに明確な像を結びたいとしている。

422 (千葉)「顔面表出と性格特性の関係」がある。facial expression の研究は昔から性格心理学的研究としての長い歴史をもち、近年比較行動学の影響によって新たな展開を示しているという。本研究は、MMPI を用いて、抑うつ傾向、軽躁傾向・ヒステリー傾向と顔面表出との関係を調べることを目的とした。16名という小標本であり、直ちに一般化することはできない。しかしながら、抑うつ傾向者において、まばたきの増加とそれ以外の表出の減少が見られ環境条件の差に対する反応差が小さいこと、又、ヒステリー傾向者では、顔面表出が少なく、環境条件の差にも影響されにくいこと、軽躁傾向者の顔面表出量が多いこと等は、今後、顔面表出の個人差の要因を明らかにする上で考慮してゆくべきものであろう。又、うつ病のような病気との関連を考えてゆく必要があるといっている。

次に423 (成田猛ら)「被暗示性の研究」がある。被暗示性 (Suggestibility) というものは、自律訓練、催眠法の領域でよく用いられる。しかしこの概念は多義的でありまいである。現時点では、どのような人が被暗示性が高いのかという質問にも十分に答えることができない。そこで本研究は調査により、この概念を構成しているで

あろう概念,あるいは類似概念をできるかぎり収集することによって,その共通要素を抽出して「被暗示性」の概念規定をしようと試みた。

今後は「被暗示性」の概念規定を明確にし,被暗示性尺度を構成しようと考えている。

以上のべた狭義の性格(パーソナリティ)以外に知能に関する発表が3つあった。なぜここに知能の発達に関する研究が人格分野へ入ったのか分らない。知能もパーソナリティの一部であり,研究の仕方やねらいによっては,当然人格のなかに所属して検討することがふさわしいテーマともなろう。しかし測定・評価の部門で発表されることがふさわしいものもあろう。

4) 社会

この領域に属する発表や論文は多い。みな力作ぞろいで,読みごたえのするものが多い。どれを取り上げようか選択に迷う。

ここでは社会関係ないし人間関係を焦点とした人格であらうから,家族関係と対人的・社会的関係に分けた。前者は更に母子関係と性役割・夫婦関係に分けられる。

先ず母子関係からみていくことにする。これに属する発表は6つの口頭発表と1つの論文とであった。母と子だけの隔離された関係ではなく,母の背景には父あり,家族関係があり,その中で母を中心とした親子関係と考えてもよい。すなわち父-母-子の三角形の関係における心理力動性をもつ母-子関係であると考えられる。

417(浅井)「価値態度に関する研究(3)——高校生とその母親との関係」がある。

この発表は高校生(男)とその母親との関係を取り上げ,子は親からどう認知されているか,親は子をどう認知しているか,という相互認知の問題と,親子間の話し合いというコミュニケーションの多少の問題を加えて,母と子(高校生男子)の価値態度の関連について検討することを目的とした。

対象は東京都内私立男子S高校2年生とその親で,S G式価値態度検査を実施した。教示は(1)生徒が通常のやり方で自分自身について回答する場合(C), (2)自分の母親ならわが子はどのように回答するだろうと,生徒の方で推測して回答する場合(PC'), (3)母親が通常のやり方で自分自身について回答する場合(M), (4)母親はわが子はどのように回答するだろうと推測して回答する場合(PC), の4つに分かれた。

また親子間のコミュニケーションの量については,11項目の各々について親と子が話し合う程度を3件法で生徒に答えさせた。

結果であるが,4種間の価値態度の関連において,同一人の記入した結果(C:PC', M:PC)は対象が異なっ

ていても有意な相関を示しやすい。その他C:PCに有意な相関を示す領域が多いのは親子の関係を示唆するが,逆にPC':PCに真理以外で有意な相関が見られないのは親子のずれを感じさせる。

対話量の多少(H:L)と価値態度の問題では,平均・相関ともに,H群で平均間で有意差がなく相関が有意であり,L群ではその逆であるといった一義的な関係が得られず,4種の組み合わせや価値領域によっても異なるものとなり,M:PCの相関で“真理”を除き,やや関連が見られたにとどまった。

全体としてまだまだ深めなければならない問題を残しているから,今後のねばり強い研究ですばらしい成果がえられることを期待する。

32:2(高橋ほか)「安全教育における母子関係の発達課題」についてのべよう。

家庭の安全,健康教育をする場合に,従来は子供に対しパターン・プラクティスや条件づけという外からの力の働きかけを実施した。しかし子供自らの力によって健康・安全行動を獲得すること,すなわち自覚的な習慣形成や自己統制力の獲得を目指した教育が必要なのではないだろうかという。この場合の母親の役割は重大で,そこには「モデルとしての母親」と「母親の促進的態度」の2つの概念が必要である。前者は外からの働きかけを内在化するために必要である。後者は,外からの働きかけによって成り立つ健康・安全教育から,自覚的な習慣形成や自己統制力の獲得というような,自らの力によって獲得する健康・安全行動への移行段階にとって,必要な態度がある(神宮ら,1983)。

この考え方や実施は現代において幼児から青年にかけて,セルフ・コントロールの力をつけていく必要のある時であるだけ,ひとり安全という問題にとどまらず,広く生きて行く上において必要なことと考えられる。本論文の構想が非常によいので今後の実り豊かな成果を期待する。

次に夫婦間の性役割の問題に移ることにする。先ず451(柿坂)「夫婦間の欲求不満度と性別役割について」についてのべよう。

Ssは男性177名,女性270名,アンケート調査で,依田(1958)の要求不満25項目を使用。5つの項目群よりなり,配偶者に対してもつ要求の水準と,その要求するものが相手に欠けていると認知する水準の2つからなる。

その結果,男性では,女性的な人や伝統的性別役割観の強い人が妻への不満が高く,女性では自己実現度の低い人は夫の家庭における役割について高い不満をもっており,性別役割度の女性性(F得点)の高い人も同様な傾向をもつという。

ペアで得られた79組の夫婦についてみると、不満総得点においても、IV群以外のすべての項目群において有意な相関がみられた。即ち、全体として不満の高い夫はその妻も不満が高く、夫が不満をもっている、その同じ領域で、妻も夫に不満をもっていることが多いことがわかった。

次に社会的・対人的関係の発表論文について述べよう。この領域に該当する口頭発表はなく、6つとも論文であった。

この中では2つの論文について述べよう。まず第1は33:1(崔)「現実自己と理想自己の認知的ずれが対人的評価に及ぼす影響について日韓比較——女子高校生の場合——」である。

本研究は、日本人と韓国人の対人評価のメカニズムの違いを、理想自己と現実自己の認知的ずれと他者評価の方向が自己および親友についての評定に及ぼす影響において両国間の比較・解明をしようとした。

Ssは女子高校2年生264名(日本M市私立普通高校132名)、韓国S市公立普通高校132名)。

要因計画は2(国籍)×2(現実自己と理想自己のずれの程度)×3(フィードバック条件)×2(評価対象)の4要因計画であった。このうち3フィードバック条件とは教師の positive feedback, 教師の negative feedback, 教師の feedback なしの3つであった。評価対象は自分と親友とであった。調査は1週間間隔で2セッションに分けられた。

結果としては、分散分析の結果、現実自己と理想自己のずれの程度の主効果とフィードバック条件の主効果に有意差が見出された。すなわち、ずれの小さな人より大きい人と、他者から評価が negative なものより positive である場合において、対人評価尺度のセッション間の評定得点の差が大きかった。このことは現実自己と理想自己とのずれの程度と対人評価は関係があるという Shavit et al, (1980) の主張と、知覚者は、自分に対する他者からの negative な評価より positive な評価を支持するという Repitone(1964) の主張と一致するものであった。日韓の比較において、この傾向は、韓国の現実自己と理想自己のずれの大きい群において顕著であった。しかし日本における、ずれの大きい群は、positive feedback 条件で自分を親友より高く評価せず、自分と親友をほぼ同程度に高めた。このことは、集団との関係を基礎とし、個人の発展をめざす韓国の集団的行動の特性と内集団の中での自己と他者の和、友好性を尊重する日本の集団成員意識のちがいによるものと考えられる。

今後は、大きな影響群としての教師と、生徒との関係が、このような実験には大きな影響を及ぼすであろうと

いうことを考え、この両国間の対人的評価のちがいを一般化するについては、より多くの Ss を対象とした比較研究が望まれるのである。

33:1(岡島)「援助行動の内発的帰属に及ぼす外発的報酬の効果」について述べよう。

人間の行動は、行動者内部の認知的要因や感情的要因、またその状況における様々な外的要因によって影響をうける。原因帰属(Causal attribution)は、人間の社会的行動の認知的動機づけの要因として重要視され、多くの研究がなされた。Kelley, H. H. (1973) は、他者の行動に対する大人の原因帰属に関する図式的分析を行い、原因帰属のスキーマを二分し、複数十分原因スキーマと複数必要原因スキーマがあり、前者は、いくつかの原因のうちいずれかが行動に影響するというものであり、後者は異なるタイプの原因と特定結果との共変を求めるものである。また Kelley は discounting principle を主張し、「ある特定の複数のもっともらしい原因があるとき、それらの原因のうち特定の原因の役割が割りきされるであろう」という。

方法は公立幼稚園児16名、公立小学校3年生16名、6年生16名、計48名(男女半々)を対象とした。

〈仮説1〉割りき原理の使用には発達的变化があり、年齢の上昇とともに割りき原理を用いる子供が増加するであろう。

〈仮説2〉割りき原理の使用と操作的意図の推論との間には連関があり、操作的意図を推論する子供は、割りき原理を用いるであろう。操作的意図は外的圧力として認知されるので内発的動機づけは割りかれると考えるからである。

結果であるが、(1)「年齢の上昇と割りき原理の使用」仮説1は証明されたといえる。(2)割りき原理の使用と操作的意図の推論との関係については、両者間に連関があり、仮説2が認められた。割りき原理の使用は認められたが、操作的意図の推論を示す反応は得られなかった者34%、推論する者は65%だった。これは「大人はなぜ報酬をくれたか」という意図の認知に関する質問はやや抽象的で、回答しにくかったのではないだろうか。

今後研究方法上の問題として、例話の主人公の性は Ss と同性にする必要があるということ。又意図をあいまいにした場合と明瞭にした場合とで割りき原理の使用に差が生じるか否かの検討も必要であろう。

こうしてこの研究は今後実り豊かとなるであろう。

5) 教授・学習

教授・学習に関係したものは全部で16あった。これを課題選択、達成動機、原因帰属、エフィカシーの4領域に分けた。

先ず課題選択ないし共同課題解決についての2つの発表のうち次の1つを選んだ。

33:1 (谷口)「課題選択の規定因としての感情価と情報価について」について述べよう。

達成場面での課題選択に影響を及ぼす要因として、今のところ感情価とする立場と情報価とする立場とにわかれる。前者の代表的な者は Atkinson である。彼によれば、課題の困難度と遂行との間には、達成動機の高い者、すなわち高動機群は逆U字型、一方低動機群はU字型曲線がそれぞれ予測される。

これに対して、Weiner ら (1972) は情報価が課題選択の規定因であり、しかも情報価は課題の特性に依存すると考える。難しさの中間度のM課題は情報価が最も大きいために、高動機群は自己に関する最大の情報を得るためにM課題を、一方、低動機群は最少の情報を求めてE (またはD) 課題をそれぞれ選択するのであると彼は説明している。

ところで、Trope (1975) によれば、情報価は課題の特性ではなく、課題の Diagnosticity に依存し、しかもその Diagnosticity は所与の課題における高能力者対低能力者の成功率を変えることにより、操作的に規定できると主張している。Trope によれば、課題の困難度だけでなく、Diagnosticity も同時に変化させた課題を与え、これらが課題選択にどのような影響を及ぼしているかを検討し、彼らの予想を支持する結果をえた。

本研究では困難度と diagnosticity をミックスさせたデザインのもとで、課題が未知かつ、かなりの自我関与の伴う選択事態でもやはり彼らの指摘するような知見が得られるかどうかを実験操作を確認した上で、動機の水準および自己認知の高さの両面から再吟味しようとした。Ss は138名の女子大学生で先ず達成動機を Mehrabian (1969) の女性用アチーブメント尺度を用いて測定した。そして課題の困難度と Diagnosticity を操作した。

本研究結果の1つの解釈として、谷口は次のようにいっている。自己能力を高く認知する者は、成功の喜びを最大にしようとする情報価とは独立して感情値の大きなM課題を選んだのかもしれない。一方、自己能力を低く認知する者は、失敗を懸念するあまり感情値を最大にするような課題よりも自己能力が反映されないような情報価の小さい課題を選択したのかもしれない。この解釈が妥当かどうか、また同様の知見が男性においてみられるかどうかは更に検討する必要があるとしている。

次に達成動機の領域からは、32:4 (桜井)「内発的動機づけに及ぼす言語的報酬と物質的報酬の影響の比較」を選んだ。

本研究は SEM (Self Evaluative Motivation Mood:

SEMモデル) を課題遂行に対して一定基準を設け、それに達したならば、ほめことばを与える言語的報酬群とごほうびを与える物質的報酬群とで検討する。この2群のSsの個人内反応過程をSEMモデルに沿って述べ、仮説を提起する。

実験1では言語的報酬群と物質的報酬群を設定し、自己評価的動機づけモデルにおける認知、感情、動機づけレベルの諸要因を質問紙を用いて検討しようとした。Ssは小学6年生44名(男女半々)。

実験IIでは実験Iと同じく言語的報酬群と物質的報酬群を設定し、自己評価的動機づけモデルにおける行動レベルの要因を、自由課題選択法により検討する。

本実験の結果では両群とも有能感の高いことが示された。言語的報酬群では外的報酬による他者決定感を強く生じることなく、有能感が形成される。したがって、自由に課題遂行ができる場面では、処遇前とほぼ同じ割合で当該課題に従事する。しかも、有能感が高まった分だけ、従事時間は長くなるであろう。

他方、物質的報酬群では、外的報酬により自己決定感はおびやかされる。しかし、有能感は高まる。したがって、自由に課題遂行ができる場面では、処遇前より処遇後の方が、少ない人が、あるいは少ない時間、当該課題に従事するようになるであろう。

原因帰属に関する領域からは先ず、445(吉田)「児童と親の学業成績に対する原因帰属について」を取り上げる。

Weiner (1974) などが、原因帰属と達成動機の高さや自己概念について研究発表をして以来、原因帰属については数多くの研究がなされており、実際の教育現場にもその視点が導入されつつある。

本研究は原因帰属の視点に基づいて、個々の児童、特に学業不振児に対して適当な指導を与えるために、児童及びその親が児童の学業成績をどのように捉え、その原因はどこにあるかということ調査し、全体としての傾向と学業不振児と思われる児童の原因帰属について考察しようとした。Ssは小学5年生39名の児童とその親に対して調査を行った。各児童に1学期の成績をよいか、ふつうと思うか、悪いと思うか判断させた後、よいか考えた場合にはよい原因は何なのか、ふつうあるいは悪いと考えている場合にはよくない原因は何なのかについて、以下6要因に対して「非常に関係が深い」から「全く関係がない」までの6段階で評定を求めた。6要因とは、「能力の高さ(低さ)」、「努力の大きさ(小ささ)」、「性格のよさ(悪さ)」、「お父さんかお母さんの教え方のよさ(悪さ)」、「先生の教え方のよさ(悪さ)」、「友人関係のよさ(悪さ)」であった。親に対しても同様な手続で評定させた。

結果であるが、児童が自分の学業成績の原因を“努力”に帰属させている。親の場合も努力に対する帰属得点が高く、また授業中の態度、家庭で学習を十分にみてやれないことを反省している。児童の帰属得点より親のそれの方が高く、しかもt検定で有意差のあるのは、努力、性格、親、友人という要因であった。児童は自己中心的に成績の原因帰属をし、親はより客観的に自分の子供の成績を分析しているといえよう。

446 (森)「児童中期の自主性と原因帰属との関連について」がある。本研究では小学3年生に対し、自主性の実態を把握し、その因子的構造を明らかにするとともに、その作用因を考えるに当たり、個人が事態の原因を何に帰属させるかという原因帰属様式との関連について考察を加えている。その結果、自主性の高い男子は、低い男性に比べて、学業達成場面では、自分の能力あるいは費した努力が成功をもたらしたと考え、運によって左右されるとは考えない。つまり成功を内的に扱っている。友人関係場面では、正事態の原因を相手に帰し、運に帰さないことが明らかになった。女子は男子ほど明確な差なしだった。

上述の「445」も「446」も児童の研究であり、「IV社会」部門の428 (藤田ら)「PFスタディ母—子場面における母親の期待水準」を参照すると興味深い。ここでは母子場面における期待水準の結果(%)が表示されているが、概して母親に好まれるのは、内罰あるいは無罰的方向で、外罰的方向は好まれないとある。今送付された教育心理学研究(第33巻第3号, 195~204)「原因帰属が学業試験の成績に及ぼす影響—Weinerの達成動機づけに関する原因帰属モデルの検討—」に興味深く読んだ。あわせ検討することが望ましい。これはSsが高校生であるが、この領域で次に大学生を対象にしている研究を紹介しよう。

443 (新名)「大学生のストレス事象に対する原因帰属スタイルとコーピングスタイルの検討」は興味深いし、特に現在大学の教職に就いている者には有益である。Ssは大学生192名に対しASQ日本版とCSQとSDS日本版を実施。現今大学生にとって、うつ病や学習性無力感の研究は緊急な問題である。本研究では、原因帰属スタイルとコーピングスタイルとの関係、抑うつ水準とコーピングスタイルとの関係について研究することを目的とした。この結果は、ストレス事象に対して内的・安定的・全体的・コントロール可能な原因帰属スタイルを示しても、抑うつ水準の低い学生は、その事象をコントロールできると認知して積極的なコーピングスタイルを採るのに対して、抑うつ水準の高い学生は、その事象をあまりコントロールできないと認知して消極的なコーピングス

タイル(自責)を採るようである。従って、抑うつ水準の高い学生は原因や事象をコントロールできないと認知する傾向があるため、消極的で非生産的なコーピングスタイル(思考回避・好転願望・自責)を採るのかもしれない。

エフィカシーの領域では4つの研究発表があったが、ここでは、437 (大熊, 他)「3次元迷路におけるエフィカシーと遂行」をとりあげる。

Ssはこのゲームに直接関係のない大学生24名で、4群に6名ずつランダムにわりあてられた。実験計画は2×2の2要因計画に従い4群を設定した。1) フィードバック要因:「自分の遂行成績が標準より良いと判断されたならば、エフィカシーは高まり、悪いと判断されたならば、エフィカシーは低下するであろう」という仮説から、エフィカシーをゆさぶる条件として、ゲーム所要時間に対応させて「みんなよりかなり速く脱出していますね」とフィードバックが与えられるS条件と「みんなよりちょっと遅いですね」とフィードバックをうけるI条件の2条件をおいた。2) 課題提示順序:課題水準の提示がレベル1から3という易から難の課題水準へ向うE条件、これと逆の提示順序で難から易への課題水準となるD条件の2条件を設けた。与えられた課題の難易水準とその移行がエフィカシー予期に影響すると考えられるからである。

結論として次のようにまとめている。エフィカシーを中心に、主観的反応をみてきた。この課題において課題印象エフィカシーにはフィードバック要因と課題提示順序の要因の交互作用があらわれた。さらに現在のエフィカシーと将来エフィカシーには、課題提示順序が効いており、エフィカシー予期を変動させていたことが明らかにされた。なおこれら3つのエフィカシーに対して、フィードバック要因は効かなかったようである。現在エフィカシー・将来エフィカシーでは、はっきりした傾向は見出されなかったが、エフィカシー予期が高まれば、より困難な課題へ立ち向かおうとすることが、示唆された。

「Teaching and Learning in Medical School, Gerge E. Miller」の「吉岡昭正訳:医学における教授・学習」という書物がある。この著作では医学教育において非知的特性の評価を重視している。例えば第1章の選抜問題のところで、2つ3つひろってみよう。

○「競馬で勝つためには、早く走れるばかりでなく、早く走ろうとする馬をもたねばならぬ」

○動機づけを与えるように授業をアレンジすることが有能な教師の仕事である。

○馬が早く走れるかどうかの大部分は、馬が妙技を出せるような状況を仕立ててくれる有能な騎士と調教師によ

るのである。

全巻を通して、医学教育心理学であり、特に人格分野、なかんずく動機づけを強調していることを付記しよう。

6) 測定・評価

この領域では研究発表13, 研究論文1で合計14の発表があった。このうち不安についての研究が5つと多い。その他は性格検査の標準化であった。標準化とか尺度構成はとかく数量的取扱いが中心で、無味乾燥にみられることもあるが、これには非常な努力が要るものである。教育心理学研究では測定し評価しうる用具を作製し、これを児童生徒に適用し、たえざる実践的検討を加えることによって、修正していくことは実に大切な研究領域と考える。このことはひとり人格分野だけでなく、教育心理学全般に通ずることである。ただその作製過程が綿密周到で、思索と実践の融合統一に心がける必要があろう。サンプルをいかげんにしたり、自分の構想を実証することのみ腐心することを止め、ひたすらに客観的、合理的な手続を一步一步着実にふんで行くことであらう。このことが教育心理学の研究労作をプロフェッショナルなものにするのであろう。数学的手続を軽視し、いたづらに評論で煙にまくことは、心理学徒の特にいましめとするところである。

この意味において、この領域に多くの発表が集まり、それぞれ立派な成果をおさめていることに敬意を表する。今日からでも使用させてもらいたい尺度が沢山用意されていることに心強さを感じず。ただこういう仕事をする場合に被験者の心理的状況一問題に対する動機づけをどうやったかについて考えざるをえない。このことについては後でやや詳しくふれる。

以上は人格分野の発表(口頭, 論文)を6領域に分けて、代表的と思われるもの幾つかについて概説した。以下は他の学会における人格分野の研究論文, 著書について、この期間中、日本教育心理学会発表に現れなかったもの幾つかについて、次に概要を述べたい。

7) 他の学会等において発表された人格分野の研究について

④ 先ず「平静の心—オスラー博士講演集

日野原重明, 仁木久恵訳 医学書院」の著作について述べたい。これは医学教育に携っている人や医学教育関連学会の方々において愛読されている。

ウィリアム・オスラー博士は1904年、当時ジョンズ、ホプキンス大学医学部の内科教授であった。かれはそれまでに医学生、看護婦、実地医家に対して行った18回の講演をまとめて *Aequanimitas* (平静の心) と題する講演集を出版した。オスラーは1905年にはジョンズ・ホプキンス大学を辞して北米を去り、英国に渡ってオックス

フォード大学の欽定教授として余世を過ごした。

この講演集は当時の医学生、看護婦、医師の心に強烈なインスピレーションを与え、医療の世界に働く専門医の生き方を示す、いわば聖書のような役割を果たし、一般人もこれを愛読し、現在も医学者や医学教育者に愛読されている。

「沈着の姿勢とは、状況の如何にかかわらず冷静さと心の落ち着きを失わないことを意味する。嵐の真ただ中での平静さ、重大な危機に直面した際に下す判断の明確さ、何事にも応じない様子、感情に動かされない態度をさす」とある。

またこんなこともいっている。「諸君は医師として世俗的な雑事に没頭するあまりに、自らの能力を荒廃させてしまうかもしれない。その結果、そのような生き方の習性で麻痺した諸君の心には、人生を価値あるものとするあの優しい感性の入る余地がなくなり、気が付いたときには、時すでに遅すぎる。諸君は感ずる心を棄ててしまったのであるから」

こういう考え方は人間不在の医学教育とならないよう、人間性豊かな医師を養成しようとする心ある医学教育者にとって現在の日本においてもかがみとすべきであらう。ひとり医者だけの問題ではない。現在の下は幼・小学から大学教育に至るまで、平静の心をもつような人格教育の目標と方法が最も必要な現在、広く一読をしてほしいと考え紹介した次第である。

適応指導において、平静の心を被教育者にいかにしてもたせるかは人格教育の今後の課題であらう。

⑤ 発達領域に編入されるべき次の論文を紹介する。

心身医学第25巻第5号(石川敬子)の「神経性食欲不振症者の性同一性発達について—健常者との生活史, ロールシャッハテストの比較による検討」を見ることにする。

思春期から青年期にかけて、自我同一性を確立する時に必ずそこに男として女としてどう生きるかという性同一性の問題が大きく関与している。ほとんどが女性において発症する神経性食欲不振症者 (*Anorexia Nervosa: AN*) は思春期心性を土台とした性同一性障害の1つと考えられる。本研究はANの心理的病態を発達的視点で把え、ANの症状を呈していない思春期の女性達との発達を比較することによって同一性の発達のあり方について考察している。目的IはANは早期幼児期における母子関係=口唇期の不成功がその原因の1つと考えられるが、Normal群(N群)と比較して検討する。目的IIは同一性の発達過程を、両群の比較、また発症年齢の異なるAN群の中での比較から考察する。

Ss は公立中学生20名, 公立高校生56名, 大学生22名

を対象として、アンケートを行い、アンケート調査からN群を選び、次にAN群と学歴、年齢が対応するものを抽出した。AN群は中核群と診断され、初診から1年以内とする。

両群ともに、ロ・テストを行い、AN群では生活史についての面接を行った。発症以降の経過については本人から聞くか、又は医師から情報を得た。

結果のまとめであるが、思春期に身体の変化を自分のものとして扱え、女性の身体をもった自分がどのように生きていくかを母親、同性の友人との関係、異性との関係を通して模索してゆくことが、性同一性発達の課題であり、思春期になっても、母子関係にこだわりのあるAN群は、母親からの脱備給がうまく行われず、母親以外の対象を通して、自らの性同一性をかくとくしてゆくことが一般に困難のようである。

中学—高校(初期, 中期青春)で発症した者と20才以上(後期青春)で発症した者とは、明らかに異なる心理的病態がみられ前者が身体像の変化を受け入れ、同性の友人との対人関係という段階でつまづいているのに対し、後者は身体像の変化は何か受け入れて初期青春を通過したものの「女性として、人間としてどう生きてゆくか」という青年期の課題につきあたって、自我同一性そのものの混乱がみられる。

次に自我理想についてであるが、N群では高校生段階から母親の生き方を認めたくて、距離をおいて、客観的に母親をみて、自らの性同一性を形成していつている。AN群に多いのは、母親との関係が悪く、母親を否定したところに自らの性同一性、自我理想を形成している。AN群では、母親に対する思いに、葛藤があり、母親を否定しつつも、そこで自分なりの性同一性を築いていけないようである。しかしAN群では「人間的に深い人間」、「人の役に立つ人間」という自我理想の確固としたものをもっている。また女性であることに対しても両群間に意識の違いがある。

◎ 人格(狭義)に所属する論文として、医学教育 第16巻・第2号に「ドクターの人格特性に関する一考察—YG性格検査による測定—」(遠山敏等)の論文がある。

目的は医師の社会的性格を把握する基礎として、心理検査を用い、医師の人格特性を測定すること、とくに、標準(Norm)との差異とともに、看護婦との比較を行うことである。

対象は山口大学医学部付属病院医師96名、対照群は大学生4136名、大学病院勤務の看護婦201名であった。

医師の人格特性をYG性格検査の結果から詳しく考察し、今後医学教育にとって、望ましい社会的性格の養成を行うのはいかにすべきかを検討したい。又調査対象を

拡大し、或は心理テスト1つよりも、面接法や他の人格検査、態度検査などを含んだバッテリーを組むことを理想としている。又年齢別、経験別などのデータを積み重ねた上で、医師の人格特性がどのように形成されるかの過程を研究する。

① 社会(対人)関係に所属する著書として、紹介したいのは、山田和夫著「父よ、母よ、子よ」—今日の「歪んだ家族を考える」(潮文社発行)がこれである。著者は神経医学専攻、現在東大医学部講師である。

今日の大学教育において、学生の人間性、人格形成において頭をいためている方々にとってはひじょうに有益な参考書である。

大学生のチューデント・アパシーの増加は困ったことである。独特の性格的な弱点に基づく反応であって、男らしさや、男としてのひとり立ちにかかわる不安がある。男性でありながらテスト不安があり、男性同一性に問題があり、妙に突っばるわりに、女々しいものを多くとりこんでいる。

母との癒着が、父恐怖、父拒否、父憎悪と結びつき、本人はおとなになりたくない成熟不安が背景にある。内弁慶で外でおとなしく、女々しいのに、内では乱暴し、最後には父への攻撃に向う。それと逆に女性では母拒否、父娘癒着というさまざまの形の問題も、「思春期やせ症」を頂点にこの十数年来目につくようになった。

親子の問題については、すでに議論は出つくした感があり、多くは文化・社会論的な立場のとらえ方で、実践にはどれだけ効果があったのか、現場で学生の指導に日夜腐心している者の眼からみると隔靴搔痒の感を否めない。

人が辿る複雑多彩な人生は、家族、家系による業としか見えない。

そこで現実の家族の歪みのさまざまを紹介しつつ、世の父たり、母たり、また子たる人々とともに家族のあり方や人間としての真の幸せについて考えてみたいというのが著者の執筆の動機であった。

交流分析などで人生脚本を分析したことがある人なら、家庭のなかの因縁とか、「親の因果が子に報いる」といわれる事実の背後には代々うけつがれる人生脚本があることがわかるのである。人生早期から身についた歪んだ人生観や自己像は、生涯を通じて、各人の行動パターンを無意識のうちにコントロールするのである。

この著書のうちで特に参考になった章は次のごとくであった。2章母と子の癒着、3章チューデント・アパシー、第5章人に頼ることの大切さを知ることから……第6章おとなになりたくない、第8章強く、強くというモットーは、第9章支えの種を播く、第10章三島由紀夫

の場合等行文平易，興味しんしんとしてつきず，一読をおすすめしたい。

㊦ 教授・学習では著書として古いが，数々の学術賞に輝く世界的大数学者岡潔の「春宵十話」をあげたい。おかどちがいといわれる向きがあるかもしれないが，大数学者の人間教育論特に頭をよくし，人間性を育てる教育の実際は幾度読んでも滋味あふるる内容である。著者はいう，人間形成は小手先の技術ではないという。著者の辿った人生そのものを分析しながら書いているから架空の理論ではない。なぜ岡が「人の情緒と教育」ということを重要視するのか。単なる道徳論ではなく，情緒が頭をつくるからであるという。

乾いた苔が水を吸うように学問を受け入れるのがよい頭だそうである。頭ができていない近頃の中・高校生は妙に凶太く，あれではてんで学問なんか受け付けない。いま，たくましさはわかっても，人の心のかなしみがわかる青年がどれだけあるだろうか。人の心がわからなければ，物事をやる場合，緻密さがなく粗雑になる。粗雑というのは対象をちっとも見ないで観念的にものをいうだけのこと，つまり対象への細かい心くばりがないということだから，緻密さが欠け，いっさいのものが欠けるという。

岡は一番難しい問題から手をつける。だから小学6年から粉河中学の入学試験に算術で失敗し，不合格となり，1年間高等小学校に通った。中学2年のとき初めて代数を習ったが，この年の3学期の学年試験では5題のうち2題しかできなかった。かれは最初に一番難しそうな問題にとり組んだところ，他の問題まで間違えてしまい，3学期の代数平均点68点というみじめなことになった。試験がすんで郷里へ帰ったが，この不成績が気になって，くよくよしていた。ところが，ある朝，庭を見ていると，白っぽくなった土の上に早春の日が当たって春めいた気分があふれていた。これをみているうちに，すんだことはどうだって構わないと思い直し，ひどくうれしくなったことを覚えている。

中学1年のとき，試験の前夜遅くまで植物の勉強をやり，翌朝起きたところ，気持がさえないでぼんやりしていた。ところが，寄宿舎の前の花壇が手入れされてきれいになり，土が黒々としてそこに草花がのぞいているのが目に入ると，妙に気持が休まった。日ざしをあびた土の色には妙に心をひかれてあと印象が残るようである。

その他面白い内容が沢山あるが割愛する。

岡の論述は「5教授・学習」所属の発表と無関係のように一見思われるかもしれないが，どうしてどうして深いつながりがある。動機づけの問題，原因帰属，課題選定，問題を解く順序等広い視野から何か啓示的なことが

照らし出される。

ミクロ的研究とマクロ的研究の調和はそれが教育実践理論であるかぎり重要なことと思われる。ゆさぶりをかけるテクニックは学習指導の実践においても重要で，その技術は教育心理学研究に負う所大であろう。

その他の領域として日本心理学会で発表されている(パーソナリティ1—8)「宗教現象に関する精神病理学的研究」をとりあげよう。

宗教体験と人格体変容について，両者の関係については，洋の東西を問わずいろいろな分野の専門家によって研究されている。シュナイダーは宗教精神病理学の学問を体系化し，人間理解に光を与えた。ここでは，宗教体験と情動反応やパーソナリティ変容について考察し，ひきつづき宗教に関する精神病理学的研究結果を報告する。

宗教妄想は，男女差なく，中壮年者に多いが，青年期に体験したという告白もある。

宗教的影響を最も影響を受けやすいのは心身の病める者である。宗教体験によって，創造性が開発されることもあり，また稀有性の事象も認められ，さらに精神的身体的な不適応を脱脚し，きわめて健康な状態へ好転することもある。

人間理解や治療過程において宗教要因を無視することは好ましくない。多くの事例から①心身の障害から宗教の方向へ，②宗教体験から心身の変調へ移行することもある。すなわち宗教によって不安や葛藤，緊張，苦悩が軽減され，症状の改善と消褪が得られることが多い。逆に，宗教体験によって幻覚や妄想へ発展することもあり，離人体験や感情失禁など心身の均衡を失う症状の増大と悪化の現象が見られることもある。

教育心理学会の発表で取り上げられていないが，現在最も重要な問題が2つある。その1つは大学入学試験における人物考査の研究であり，もう1つは，小，中学校教育にひどく深刻な影を落としている「いじめ」の問題である。

前者については医学教育，1985，vol 16，No. 5「医科大学入学試験における人物考査に関する研究Ⅲ 評価員の性格の評価に及ぼす影響および有効な組合せについて」(手塚統夫他)の研究がある。これはずっと前から継続研究である。筆者もこの問題を手がけて7年目になるが，中々明確な見透しをえないまま人物考査を実践してきた。

さて本研究は，1つの試みとして，教員，学生寮職員および学生に評価者になってもらい，各人の評価相互間の相関係数を算出し，これに因子分析を適用した。

方法は昭和57年度入学者101名を入学後1年の時点で被評価者とした。教員及び職員にこの学生名簿を渡し，

8つの質問を出し、はい、よくわからない、どちらともいえず、否の記号を○, △, ×で答えさせた。また態度テストとして交流分析理論に基づくエゴグラムを改良した50問を出した。

結論的にいうと、①見方の似た者、離れた者を定めることができる。②態度テストによる評価者の分類を上の上の近遠関係にあてはめたところ、同一分類の者は似た見方をする事が判明した。③評価者の分類を見方の近似度に従って、一応3群に分けた。同一群から3名を選んで1組とし、3人共に○をつける被験者の数は、別の群からの評価者が入ると、この数が激減した。④違った見方をする者同志でも、被評価者に×をつける場合は互に近い見方をするようである。

「いじめ」の問題については、日本心理学会第49回大会では、非行・犯罪の分野で僅か2つ発表があるだけである。これ程重大な問題が科学の研究の対象にならないのはどうしてであろうか。

8) 感想と要望

勝手な感想や希望を述べることは容易であるが、実行が困難である。研究内容と方法について思いつくまま述べる。

① 研究内容

研究テーマの選定が発表者にとって重大であり、これを読み、聞く人にとっても興味のあるところである。一旦この研究課題に頭を突っこむと、中々ぬけ出せない。これは発表者なら誰も経験するところである。個人がどういうテーマを選定するかは、個人のパーソナリティと深く関わり合っている。ウィリアム・ジェームズがプラグマティズムの中で、The tender-minded と The tough-minded について述べ、学説の論争は純粋に知的なものではなく、研究者の気質上の差異であるとしている。これは哲学の問題のみでなく、教育心理学においても同じで、人格分野でも、いかなる領域の研究を、どういう方法で研究を進めていくか、それ自身が研究者のパーソナリティの問題で、これだけでも1つの研究課題となろう。

学会には、夫々の伝統と経過があり、日本心理学会と日本教育心理学会とは同じく人格分野の発表をみても、取り上げる課題にかなりの差異がある。例えば禅とか宗教体験の研究となると、日心の発表が主流となる。

そこで筆者流に両学会の人格分野の研究発表を7領域に分けて、集計してみた。日本教育心理学会(以下日教心という)で最も多い順から3領域をあげると①測定・評価 ②教授・学習 ③社会となるが、日本心理学会(以下日心という)では①人格(狭義)、②測定・評価、

③臨床・障害であった。そして日教心では臨床・障害の口頭発表には1つもなかったと思う。こういう発表の差異も両学会のいきさつと経過に依ることであろう。日心がパーソナリティをオルソドックスの立場から取り上げようとするれば、日教心が学校教育に主体をおいて、測定・評価をはじめ教授・学習や社会・対人関係に重点をおいたのは当然かもしれない。日教心では1)でのべたように適応指導が5つもあり、これはよい芽生えて大いに育ててほしいものである。しかし前にもふれた如く、現在緊急な社会問題にまで発展している「いじめ」の問題が日心で取り上げられているが、日教心ではゼロである。筆者の見落とししならば幸である。この問題こそ日教心が正面から取り組むべき課題ではなからうか。

なお人格分野と臨床・障害(非行・犯罪を含めて)は密接に関連する研究課題である。日教心では臨床・障害分野の研究発表は75でひじょうに多い。日心が91でや多いのは世帯の大きさから当然であろう。パーソナリティの研究は、やがて臨床部門に舞台が移っていくのは当然の流れであろう。この意味で、教育心理学年報第24集「自主シンポジウム」は教育方法の具体的展開を論じた、有益な内容といえよう。ここから更に治療教育へ臨床指導へ自然に移って行くだろう。特に人格の問題は臨床において結実するといっても過言ではないと思う。

教育現場と日教心研究とのつながりについては、ずっと前から年報でも要望されてきたことであるが、もう一歩進めてほしいと願わずにはおれない。研究発表は学問的でなければ、科学的でなければという思いこみが、つい現場とのつながりを薄くするのではないだろうか。さらに日教心では家庭の問題、特に母子関係についての研究にかなり重点がおかれているのは、よいとしても、学校教育を中核として教育を推進するかぎりにおいて、ふれざるを得ない親子の問題として研究してゆく態度が今後とも必要と思う。なお社会的風土が人格形成に大きな影響を及ぼすことは申すまでもない。人格の分野の発表でコミュニティと児童・生徒の人格形成、地域が育てる人間性についての研究が殆どなかったと思うのは筆者の見落としであろうか。和辻哲郎が「風土」の中で日本国民性を「しめやかな激情」といい、それは日本の風土が育てたものといっている。コミュニティが育てつつある子供の人格の問題について、教育的視点から実証的に研究がなされることを希望する。

② 研究方法

先ず質問紙による調査や人格検査をする場合被験者の問題がある。Ssがどういう意識で、いかに動機づけられて、教示に従って回答したのであろうか。桜井の「児童用社会的望ましさを測定尺度(SDSC)の作製」という

論文やMMPIのLie scoreなど参考にすべきものはある。しかしそれ以前の問題として、子供を受持つ教師が、こちらが依頼する調査やテストをいかに受けとめているだろうか。児童・生徒は教師の価値観を見抜くカンが鋭い。教師が重要視しないものは、軽く、こと勿れ主義に反応する。子供を通して父兄に届けられた質問紙等あまり信用できない。信用される回答内容をうるためには、研究者の少々の努力ではえられない。

教育心理学研究では人格という分野が価値的見地から一般に見られ易い機微な問題であるだけに研究者自身が現場に足を運んだ研究でなければならぬ。学生やその他補助者が教授の代理で教室現場に臨んだのでは果たして研究体制として十分であろうか。人格の研究は研究者自身が脚でかせいたものでないと信用できない。人格の問題は人手とコンピューターさえあれば出来上るという安易な研究領域ではなからう。

次にパーソナリティを研究する場合に、nomothetic approach と idiographic approach があることは申すまでもない。筆者の独断をいわせてもらおうと、先にものべたジェームスの tough-minded の方々は前者を、soft-minded な方々は後者をということになる傾向があると思うが、どうだろうか。それはとも角、Allport がパーソナリティは個人特有なもので、他人と共有できないとすれば、個人特有なものとして把える個性記述の方法とられるのは当然であろう。事例研究が日教心発表で、あまり見られなかったことはどう考えたらよいのであろうか。また20数年前からQテクニークやPテクニークが華やかに研究の方法として登場したのに、今衰退しているのはどういうことだろうか。通俗的見解のひれきに終る事例研究では物足らず、少なくとも科学的客観性とアカデミズムを維持するのは学会の責任であろう。科学性と個人的具体性が求められる。

教育心理学も科学であるからには、一般的法則を追求して、さまざまの変数を統計的に処理しようとするのは当然であろう。しかしこれでなければ研究でないというのは云いすぎであろう。一般的法則に至るのは長い時間かけて、やっと到達できる段階で、それまでの積み重ねが大切であろう。ステップを一步一步ふみしめて行く研究の経過を大切にしたい。

仮説検証の方法として統計的処理をしてゆくのは当然であろう。ただ調査結果や検査結果を数量化して、相関や差の検定ないし、変量分析・さては因子分析と大体の道筋が決まってきた。あとは計算機の仕事だからとあまり論争しないし、発表者もなぜこういう検定の仕方をするか、なぜRテクニークが必要かという説明が乏しい。分散分析でも、いろいろの方法があり、研究のねらいや

方法によりそれぞれふさわしい分散分析法を選定しなければならないが、この面の綿密な検討が欠落してはいないだろうか。

9)まとめ

人格の分野の発表を一々読ませていただいて、似たもの、同じものをグルーピングしたが、あまりに繁雑になるので、更にこれをグループ同志で類似した項目にまとめていくうちに、日教心採用の部門と大方一致した。全然同じではなく、適応指導は新しく設定し、原理はなく、臨床・障害は別の部門で扱う教育心理学研究体制に従いこれを省いた。すなわち、1 適応指導、2 発達、3 人格(狭義)、4 社会、5 教授・学習、6 測定・評価となった。教育心理学研究のなかには人格の分野として一緒に扱ったらよいと思う論文があったが、対象者が障害児である場合は、臨床・障害の分野で一括扱われているので、それにしたかった。

どういう規準で人格分野の研究に属すると認めたかについては、疑問が最後まで残った。果たしてこれが人格分野の中に入れられるのが適当かどうか疑わしい研究もいくつかあったが、今更ここでどうすることもできない。今後の取扱いにおいて検討されることを期待する。

また日教心の発表や日心の論文についても、日教心の人格所属の方針と思われる方法で発表数を集計し比較し更に、質的な差異についても検討した。詳細は割愛するが、日心と日教心とはお家の事情や世帯の大きさ等がちがっているようで、それだけに差異があったように思う。日心の人格分野乃至臨床・障害の分野の研究発表は医学との関係が深いように思う。各学会の特色はそれぞれ生かしながら、両学会に所属する会員が多く、歴史的にも密接な学会相互のことであるから、同じ人格分野の発表ならば、今後とも質的にも比較検討しながら、相互に補点し合いつつ、研究を進めたらよいと思う。

人格領域の研究は両学会のみでなく、最近では医学の分野では重要研究テーマとなっている。そこで医学関係の学会において人格はいかに研究されているかについて、日教心の発表の中に今回見当らなかった課題を扱った論文や著述を領域別に若干あげて、解説しておいた。日本心身医学会にしる、日本医学教育学会にしる、人格分野の研究はまことに真剣で現在の切実な問題を科学的良心にしたがって、扱っている。教育心理学研究としても、医学方面の研究は必要であろう。一端の紹介であるが、このことが医学会関係の人格研究と相提携する機運ともなれば幸である。

日心では医学との関係の深い発表が多いのも、歴史が日教心より古く、世帯が大きいだけに、医学者の会員もかなりいるらしく、これらの会員が学会で発表してきた

ことと関係があるのかもしれない。

脳の研究は医学任せでなく、教育心理学の問題として、今後学会で取り組んでもらいたい。

なお本稿のまとめ方は学会ご依頼の方針にそっていないのではないかとおそれている。とくに「主要な研究を論評しながら、討論をすすめる、問題を掘り下げる」という、趣旨にそいえなかったことを遺憾とする。筆者の能力の問題もあるが、時間的に紙面的によゆうがなく、74の発表(口頭・論文)を前面に出して、全部読ませていただいて、私なりに概括しただけで責を免れたいと思う。

引用文献

- 浅井邦二他 1985 価値態度に関する研究(その3) 一高校生とその母親との関係 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 414—415.
- 千葉浩彦 1985 顔面表出と性格特性の関係 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 424—425.
- 淵上克義 1984 大学進学決定におよぼす要因ならびにその人的資源に関する研究 教育心理学研究 32, 228—232.
- 藤田圭一他 1985 P-F スタディ母—子場面における母親の期待水準 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 436—437.
- George E. Miller (吉岡昭正訳) 1977 医学における教授—学習 篠原出版
- 日野原重明・仁木久恵訳 平静の心—オスラー博士講演集 1983 医学書院
- 石川敬子 1985 神経性食欲不振症者の性同一性発達について—健常者の生活史, ロールシャッハ・テストの比較による検討 心身医学第25巻第5号 396—402.
- 柿坂緑 1985 夫婦間の欲求不満度と性別役割について 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 482—483.
- 清俊夫 1985 適応感と学校生活との関連性に関する心理学的研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 382—383.
- 木下優子他 1985 3次元迷路におけるエフィカシと遂行(Ⅱ)—主観的メジャー分析— 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 454—455.
- 久世敏雄他 1985 中学生高校生の学校生活への適応に関する研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 404—405.
- 桑原知子 1985 人格の二面性について(10)—新スコアによる検討 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 434—435.
- 小泉令三他 1985 転校生の新教育環境への適応 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 384—385.
- 松原達哉 1985 大学生の留年に関する研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 418—419.
- 成田猛他 1985 被暗示性の研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 426—427.
- 大野久 1984 現代青年の充実感に関する一研究—現代日本青年の心情モデルについての検討—教育心理学研究, 32, 100—108.
- 岡島京子他 1985 奨助行動の内発的帰属に及ぼす外的報酬の効果 教育心理学研究, 33, 60—64.
- 桜井茂男 1984 内発的動機づけに及ぼす言語的報酬と物質的報酬の影響の比較 教育心理学研究 32, 40—48.
- 下山晴彦 1984 ある高校の進路決定の過程の縦断的研究 教育心理学研究, 32, 206—211.
- 佐藤純子他 1985 大学生の自己受容に関する研究 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 410—411.
- 崔光善 1985 現実自己と理想自己の認知的ずれが对人的評価に及ぼす影響について日韓比較—女子高校生の場合—教育心理学研究, 33, 87—92.
- 新名理恵 1985 大学生のストレス事象に対する原因帰属スタイルとコーピングスタイルの検討 日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 466—467.
- 高橋道子他 1984 安全教育における母子関係の発達課題 教育心理学研究, 32, 128—132.
- 高橋裕行 1984 自我同一性と Marcia の同一性地位面接: 批評的展望 教育心理学研究, 32, 320—328.
- 田中宏二他 1985 職業選択に及ぼす親の職業的影響—小・中学校教師・大学教師・建築設計士について—教育心理学研究, 33, 171—176.
- 谷口伸光 1985 課題選択の規定因としての感情価と情報価について 教育心理学研究, 33, 49—54.
- 遠山敏他 1985 ドクターの人格特性に関する一考察—YG 性格検査による判定— 医学教育, 第16巻, 第2号, 122—127.
- 若林明雄 1985 パーソナリティ類型論的検討(Ⅱ) 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 432—433.
- 山田和夫 1980 父よ母よ子よ—今日の「歪んだ家族」を考える 潮文社
- 山田ゆかり 1985 青年期における自己概念(Ⅳ) 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 408—409.
- 八島喜一他 1985 児童・生徒の Locus of Control に関する研究—宿泊教室の効果—日本教育心理学会第27回総会発表論文集 460—461.
- 吉田明弘 1985 児童と親の学業成績に対する原因帰属について 日本教育心理学会第27回総会発表論文集 472—473.
- 坐間味宗和 1985 宗教現象に関する精神病理学的研究(22) 日本心理学会第49回大会発表論文集 232.